

アメリカ第三代大統領トマス・ジェファースンの自邸

モンティチェロ



イタリア・ヴィツェンツァ

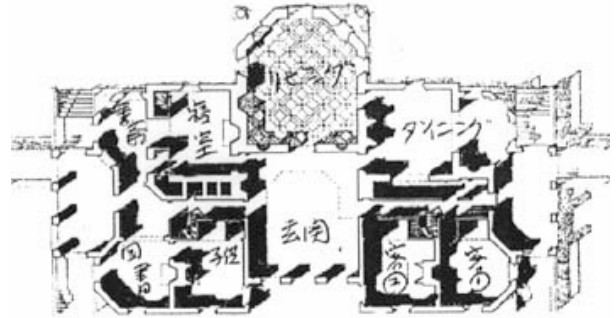
私がこの建築を訪ねたのは1995年1月のこと。南部の住宅を視察した旅の途中に立ち寄りました。その時の記録をここに紹介します。その方が気持ちまで伝えられると思うので。



この旅の感想を・・・と問われれば即座に「モンティチェロがよかった」と答えるであろう。米国第三大統領トマス・ジェファースン（以後J）の自邸モンティチェロは、眼下にシャルロットツビルの町を望む丘の上にその白い姿をみせていた。

広大な敷地・・・というよりは大地の上に、黒人奴隷を200人も使っていたというその館は、さぞ豪壮なものだろうと想像していたが、実際はJの人柄を反映してか実に人間の尺度をわきまえたスケールで立っていた。しかし、これらの社交としての目的をもった部屋は、政治家Jが客を迎えるのに不自然なほど瀟洒なものだった。

子供達と過ごした部屋も小さすぎるような気がしたくらいだし、続くライブラリーも7千冊の蔵書があった割には小さく、そこに立ったままで描く図面台が置かれていた。書斎は別にあって、しかもそれが寝室と結びついていた。この不可思議な部屋は二つの部屋の間仕切り部分とでもいうような所にベッドが置かれ、その上はクローゼットになっていた。・・・



我々はその後、チャスターやサバナで16～1700年代のジョージアン住宅を見ながら当時の生活に思いを巡らせた。それは社交中心の生活で、まずダイニングで食事をし、主婦が自ら給仕をしてもてなし、その後はリビングで酒を飲み、音楽を聴く。男達はその後カードルームでゲームを楽しみ、タバコを吸う。女達はデザートを食べながらお茶を飲んで四方山話にふける。そんな余所行きの生活を中心にして、多くの召使いを使いながら、住まいは社交を重視したものに作られていった。米の住宅に今でも残る、リビング・ダイニング（ハレの場）とブラックファスト・ファミリールーム（ケの場）の二重構造は、今でも社交をホームで行うという生活を反映しているのである。

ジョージアンのプランテーション住宅にみたリビング、ダイニングはそうした社交を形式的に反映したものばかりで、そこに施主の姿はみえてこないし、どんな人間だったのだろうかという興味すら湧いてこない。しかし、Jのモンティチェロは玄関ホール、リビング、ダイニング・・・特にダイニングは形としてのパーティーを打ち破って、主人自らが客と対するような主人の気配が感じられるものだった。人間の寸法を越えたものではなくて、各々の部屋は玄関、リビングを包むように配置され、しかもその全ての部屋から庭が望めるのだった。そして、そのつながりは驚くほどにスムーズで無理がない。後になって、その間取りをみると、半八角と四角の部屋が実によりバランスを保ちながらメリハリのついた部屋の連なりをみせていることに気付いた。間取りというものはこのようにして流れるように無駄なく形よく作られるべきもの・・・といった見本のような気がしてくる。



人間が人間以上の威厳をもつことが求められた権力の時代にあって、Jは自信が建築家としての立場からモンティチェロを自分自身を見失わない大きさに描いた。このことに私は深く敬服するし、一人の人間として親しさを感じずにはいられない。

Jは当時誰もが建てていたジョージアン様式を嫌ってヴェネチアのパラディオのデザインを求めた。しかし、モンティチェロは安定感と丸みをもったことによって、ロトンダを越えた美しさをもっている。ロトンダは人間が住むという行為が成立するにギリギリのデザインであったから、人間の尺度というやさしさに欠けていた。